

## 「思索の事柄」と「無」

松井吉康

ハイデッガーにとって、思索とは、徹頭徹尾「存在の思索」であった。しかもそれは、「存在は、思索の事柄である」という意味において、そうなのである。こうした「思索と存在の共属」は、ハイデッガーの思索の核心であると言っても良いだろう。だが、思索と存在は、本当に彼が考えているようなものなのだろうか。私には、こうした思索の理解は、他ならぬ存在の問いを遂行する上で、決定的な点を見逃すことになるよう思われる。

「思索と存在の共属」という考えは、むしろ、ハイデッガーが初めて言い出したことではない。彼自身が繰り返し引用するように、その最初の姿は、パルメニデスの有名な断片三に現れる。いわく「存在と思索は同じものである」。この断片を巡っては、様々な解釈があるが、ここでは論じない。ただ、この断片がハイデッガーの思索にとって、極めて重要な役割を果たしたことだけは、彼自身の証言からも明らかである。では、パルメニデスは、終始「存在のみが思索の事柄である」と主張していたのだろうか。断片三に先行すると考えられる断片二には、次のような趣旨の言葉がある。「思惟されうる道としては、次のものだけがある、一つは『存在する、そして非存在は不可能』という道、もう一つは『存在しない、そして非存在は必然』という道」。ここで重要なのは、パルメニデスが、「存在しない」という道を思惟しうるものとみなしていることである。もちろんこの「存在しない」という表現の意味を巡っても様々な解釈があり、未だに定説はないのだが、私自身は、この断片が、究極のオルタナティブを語ったものであると考えている。つまりそれは、「『まったく何もない』のではない」と「まったく何もない」という二つの可能性（以下、「無ではない」と「端的な無」と呼ぶ）を提示しているように思われるのである。

「無か、それとも無ではないのか」という問いは論理的に考え得る究極の問いである。以上の解釈がパルメニデス解釈として適切であるかどうかはともかくとして、これが、究極の二者択一であることだけは、疑いようがない。だが、もしそうだとすると、ここでは端的な無が思索可能であると言われていることになる。これは、「存在のみが思索の事柄である」というテーゼとは相容れない。むしろハイデッガーがしたように、「無」を存在の問題の中に取り込みさえすれば、この両者は矛盾なく論じることが出来る。だが、私はここで問いたいのだが、端的な無は、存在の問題に属するのだろうか。端的な無は、その表現から

して、一切の存在と断絶しているのではないか。存在の思索のうちに取り込まれた瞬間から、それはもはや端的な無であることをやめているのではないか。端的な無は、その定義上、存在（それが何を意味するのであれ）を前提には出来ない。存在が前提される限り、そこでは端的な無が真となる可能性は消失する。端的な無は、ハイデッガーが語る無ではない。端的な無は、絶対に存在の問題ではあり得ない。にも関わらず、それは、思索可能なのである。

さらにもう一つ、先のパルメニデスの断片から、私たちは、極めて重要な示唆を得る。それは、「無ではない」が、存在の含意、しかも究極の含意であるということである。従来の哲学は、存在の究極の意味を確定するには至らなかったのだが、私の考えでは、「まったくの無ではない」こそがそれなのである。

「端的な無を主題とした議論などあり得ない」というのは、従来の哲学の常識であった。しかし端的な無という可能性を考えることで、そうした無から「無ではない」への移行が不可能であることが明らかになる。「無ではない」は「無ではない」をのみ前提とするのであって、絶対に無を前提には出来ない。このことは、存在の理解にとって決定的な意味を持つ。というのも「無ではない」が「存在する」の究極の含意であるとするれば、究極の意味での存在は、何らかの「働き」ではありえないことになるからである。「無ではない」は、働きではない。働きが働きであるためには、その働きが働いていない可能性がなければならないからである。しかしまったく何もないのであれば、それは何もなければならぬ。「無ではない」は、定義上、端的な無を前提としない。つまり「無からの生成」を語る議論は、すべて、端的な無を問題としていないのである。これのみならず、哲学の歴史が語ってきた無のほとんどは、実は端的な無ではない。そうした無の曖昧さは、存在の曖昧さと一つであった。他方、端的な無は、そうした曖昧さを完全に脱却しているように思われる。そしてその否定である「無ではない」もまた、そうした曖昧さを完全に脱却しているように思われるのである。